かささぎ 通信 第38号

2015年10月9日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一五年九月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和8年12月号初出の二作品を読みました。「茂作」・「五年のころ」

「茂作」（名・森三郎）には、活動写真の話が出てきます。

これまでにも森三郎作品の中には、活動写真のことが扱われていました。「雪」（『赤い鳥』昭和8年4月号）には「写真入りの活動のビラ」のことが、「乳母」（『赤い鳥』昭和8年7月号）には、活動写真の宣伝の幟をかつぐ小学生のことが出てきました。幟には映画のタイトルも書かれていました。私たち「森三郎の作品を読む会」では、森三郎さんが、映画がお好きだったことを、ご長女の保澤やす子さんからお聞きしていました。また、「乳母」の中に登場する映画館のモデルはどこなのかということも、検証してきました。（詳細は二〇一六年一月発行予定の機関誌「かささぎ」二号に掲載されます。）そして、今号の「茂作」で、実際に映画のタイトルとその内容そのものが作品の中心の題材になっているのを目にした時には、軽い興奮を覚えました。

ここに出てくる活動写真は「少年探偵」というアメリカ映画で、ある田舎町に住んでいた主人公の孤児・ホップ少年が、ニューヨークに行きたいと思いつめて、その夢をかなえ、ニューヨークで名探偵に救われ、自分も少年探偵になり活躍するという内容だと紹介されています。「20世紀アメリカ映画事典」によれば、一九一七年制作、一八（大正7）年12月日本で公開されたジャックピックフォード主演の「少年探偵」という無声映画があります。森三郎さんが、その子ども時代に、いたずらが大好きな子どもを主人公にしたスリル満点の連続活劇に夢中になっていたとしても、不思議はありません。「少年探偵」に憧れた子ども時代の気持ちを、昭和8年の『赤い鳥』の「茂作」に重ね合わせたような気がします。

茂作少年は、学校で掃除当番のぞうきんがけをしないですむように、ちょっとした小細工をして先生に叱られ、母親にも叱られ、ホップ少年のように汽車にとび乗って、東京へ行きたいと思います。しかし、駅のホームに立っても、現実は映画のようなわけにはいかないことに気づいて、汽車を見送るという話です。反抗期の少年の、現実逃避したいという想いを、映画の中で見た少年への憧れに昇華させているのは、微笑ましい気がします。三河の田舎町とはいえ、刈谷の町中に住んで文化的環境に触れていた森三郎さんだからの作品ではないでしょうか。

「五年のころ」（名・大葉しげ子）は、五年生の仲良し三人の女の子たちの話です。三人というのはちょっとしたきっかけで、二対一になって気まずくなったりするものですが、そんな微妙な心理を描いています。この作品については、鈴木三重吉がこの号の「講話　通信」の中で次のように述べています。

創作童話では、大葉しげ子さんの「五年のころ」は、あの年代の少女の気持ちの動きを、自然のまゝよくゑがいた、眞實な作品です。

（『赤い鳥』昭和8年12月号94ページ）

森三郎さんは少年を描いた作品に特徴があると思ってきましたが、今までに読んできた作品の中にも少女たちを描いた作品がいくつかあることに、あらためて気づきました。昭和8年の『赤い鳥』には、6月号「あのころ」（名・北村よしの）、8月号「針」（名・利根川たみ）、そして今回の「五年のころ」と続きます。いずれも少女たちの友情をテーマにしていて、しかも女性名義での作品です。少女たちの微妙な心理を描くには、その方がよかったということでしょうか。11月号の「ほたる」は、これはいとこ同士の話で、風物詩的要素もあるので、「森三郎」の名で発表してもよかったのでしょう。

○ 次回予定　11月13日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和9年2月号初出作品

「風船虫」・「秋蝉」（「夜長物語」所収）